

高松港頭土地区画整理事業
平成9年度埋蔵文化財発掘調査概報

西打遺跡
高松城跡（西の丸町）

1998. 3

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1. 本書は、高松港頭土地区画整理事業に伴い実施した平成9年度埋蔵文化財発掘調査の概要を記録したものである。対象遺跡は、西打遣跡と高松城跡（西の丸町）の2遺跡である。
2. 本調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当として実施した。
3. 本年度の調査組織は、以下のとおりである。

総括	所長	大森忠彦
	次長	小野善範
総務	参考事	別枝義昭
	副主幹	田中秀文
	主事	佐々木隆司
調査	参考事	近藤和史
	主任文化財専門員	藤好史郎
	主任文化財専門員	中西昇（西打遣跡）
	文化財専門員	島田英夫（西打遣跡）
	文化財専門員	北山健一郎（西打遣跡）
	文化財専門員	宮崎哲治（高松城跡）
	文化財専門員	岡本利（高松城跡）
	文化財専門員	多田佳弘（西打遣跡）
	技師	住野正和（西打遣跡）
	技師	乗松真也（西打遣跡）
	調査技術員	東条貴美（高松城跡）
	調査技術員	門脇範子（西打遣跡）
	調査技術員	森川歩（西打遣跡）

4. 調査にあたっては、関係機関・地元の方々をはじめ下記の方々から多くの協力を得た。記して謝意を表したい。

京都大学　金田章裕、徳島文理大学　石野博信、岡山理科大学　亀田修一、
奈良国立文化財研究所　山中敏史

5. 本書の執筆は、中西・北山・宮崎・乗松、実測・製図は北山・門脇・森川が行い、編集は北山が担当した。なお、実測の一部には徳島文理大学院生　福田彰浩氏の協力を得た。

6. 摂図の一部には、国土地理院地形図（1/25,000）を使用した。

本文目次

I. 調査の経緯と経過.....	1
II. 西打遣跡の発掘調査.....	2
1. 立地と環境.....	2
2. 調査区割について.....	2
3. 各調査区の概要.....	6
・ I 区.....	6
・ II 区.....	11
・ III 区.....	19
・ IV 区.....	23
4. まとめ.....	26
III. 高松城跡（西の丸町）の発掘調査.....	27
1. 調査に至る経緯と経過.....	27
2. 調査の概要.....	28
3. まとめ.....	30

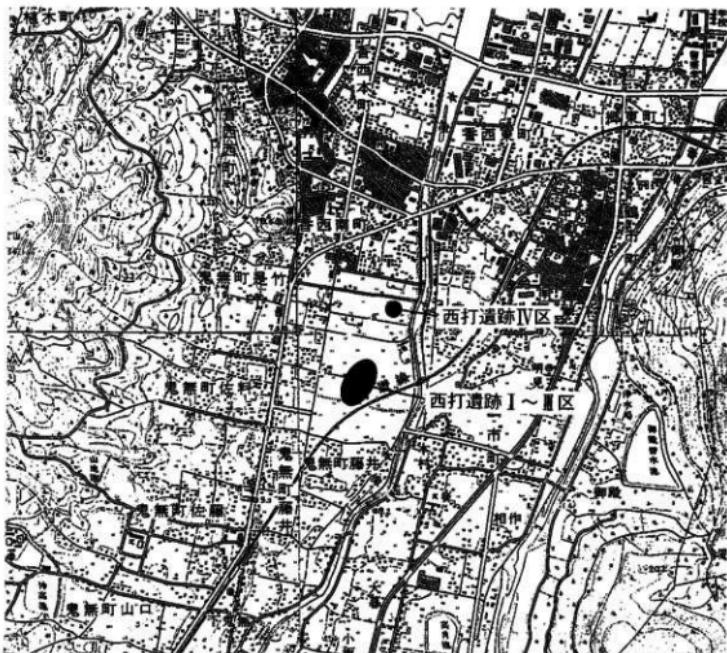
挿図目次

	写真目次
第1図 遺跡位置図.....	1 写真1 SD01・02 完掘全景（南より）.....6
第2図 昨年度調査区と調査区割図.....	2 写真2 II-2区全景（北より）.....11
第3図 I～II区遺構配置図.....	3～4 写真3 II-2区西半部全景（北より）.....11
第4図 I区遺構配置図.....	5 写真4 II-2区全景（西より）.....11
第5図 SD01・02 断面図.....	6 写真5 II-2区東半部全景（北より）.....11
第6図 II-1区遺構配置図.....	7～8 写真6 SH02 完掘状況（南より）.....13
第7図 II-2区遺構配置図.....	9～10 写真7 SH02 遺物出土状況（東より）.....13
第8図 SH01 平・断面図.....	12 写真8 SB17 全景（北東より・右奥はSB16）.....13
第9図 SH02 平・断面図.....	12 写真9 II-2区掘立柱建物跡群（北より）.....14
第10図 SB20 平・断面図.....	13 写真10 SB03 全景（西より）.....14
第11図 SB02 平・断面図.....	15 写真11 SB03 雨落溝（SD06）土層（南より）.....14
第12図 II区遺構配置図.....	18 写真12 SB03内SK01遺物出土状況（南より）.....14
第13図 SB23 平・断面図.....	20 写真13 SB02 全景（南より）.....15
第14図 SB27 平・断面図.....	20 写真14 SB13・14 全景（北より）.....16
第15図 SD15 断面図.....	21 写真15 SD03 土層断面（南より）.....16
第16図 SE01 断面図.....	22 写真16 SD09・10 全景（北より）.....17
第17図 IV区遺構配置略図.....	24 写真17 II区全景（南より）.....19
第18図 出土遺物実測図.....	25 写真18 II区掘立柱建物跡群（西より）.....19
第19図 遺跡の位置.....	27 写真19 SB23 全景（北より）.....19
第20図 遺構配置図.....	28 写真20 SB27 全景（北より）.....21
第21図 SE9701 平・断面図.....	29 写真21 SD15 土層断面（南より）.....21
第22図 SE9702 平・断面図.....	30 写真22 SE01 遺物出土状況（南より）.....22 写真23 調査区全景（北より）.....29 写真24 SE9701 全景（西より）.....29 写真25 SE9702 全景（南西より）.....30

I. 調査の経緯と経過

平成9年度の高松港頭土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業は、昨年度に引き続き、高松城跡（西の丸町）と西打遺跡（JR貨物操車場の移転予定地・高松市香西南町および鬼無町）において実施した。調査は平成9年4月1日付けの香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で締結した平成9年度埋蔵文化財発掘調査事業に関する契約に基づいて実施した。高松城跡の今年度の調査対象地は昨年度の調査部分の北東隅の300m²について行ったが、面積が狭小なことと既設の国労会館の基礎が地中深くに及んでいたために調査期間は2ヶ月足らずであった。調査は6月2日の機械掘削により開始し、7月29日をもって終了した。

西打遺跡の調査は昨年度の予備調査により決定された25,673m²のうち、昨年度終了部分の2,000m²を除く23,673m²について行った。工事計画との調整の結果、鬼無町と香西南町との境界である舟入川を挟む南側の18,673m²については、下半期には工事に着手することとなり、調査期間は6ヶ月しかとれなくなったため、上半期は3班体制で発掘調査を実施し、下半期で北側の調査区（5,000m²）の調査を実施することとなった。



第1図 遺跡位置図

Ⅱ. 西打遺跡の発掘調査

1. 立地と環境（第1図参照）

西打遺跡は、勝賀山と石清尾山とに挟まれ、また、本津川と香東川によって形成された沖積平野に位置する。本遺跡の西側には南北に走る県道33号線が走り、南は舟入川、東は本津川に囲まれている。

本遺跡は金田草裕氏の復元によると、旧香川郡の10条18里および19里にあたる部分に位置する。

地形的には、全般に平坦で標高は約2~4mと南へ行くほど低い。調査区は黄色粘土をベースとする安定した地盤部分にあたり、あまり本津川の氾濫を受けていない。高松市街地周辺にありながら、水田や畠が今も広がる地域であり、高松平野各所に認められる条里地割の名残が今も顯著に残る地域である。

周辺の遺跡の分布を見てみると、古墳時代の前方後円墳として著名な今岡古墳が本遺跡の南東約1kmに所在する。また、古墳時代後期になると、本遺跡南東約2kmの神高池を中心とする地域に多くの古墳が所在する。時代が下ると、香西氏ゆかりの遺跡が広く分布している。居館跡とされている約1町四方の規模をもつ佐料城跡や香西氏の結城である勝賀城跡、香西氏一族の居館跡とされている藤尾城跡などが所在する。

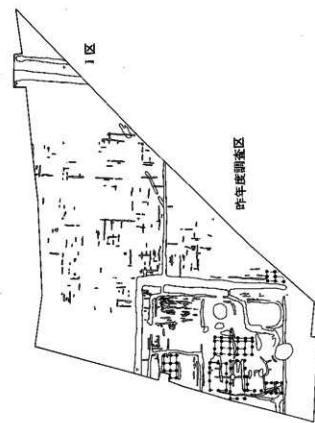
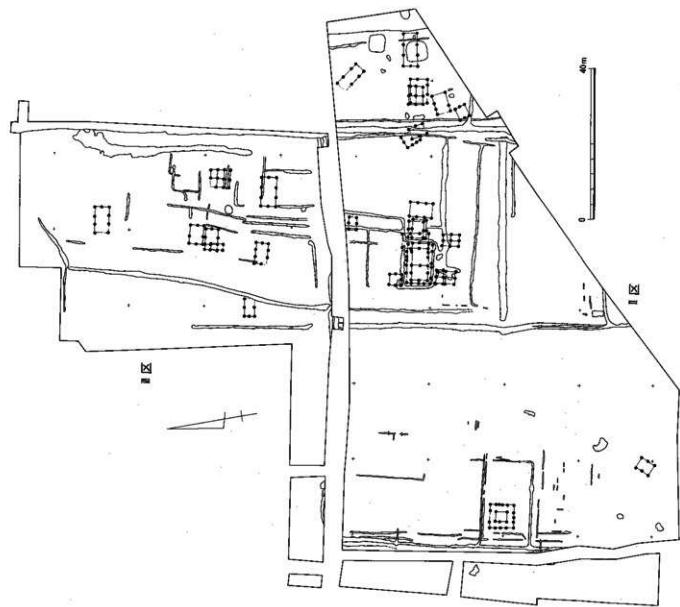
2. 調査区割について

平成9年度の調査は、前年度の北側および舟入川以北の地域で実施した。予備調査の結果と周辺に残る条里地割の施工時期を確認するために舟入川北側の坪およびその周辺の畦畔や街路・水路を取り込んだ形で調査区を設定した。調査区は大きく分けて舟入川以南のⅠ区、舟入川以北の坪にあたるⅡ区、Ⅱ区の北側の坪にあたるⅢ区、Ⅲ区から二坪北側の坪にあたるⅣ区からなる。

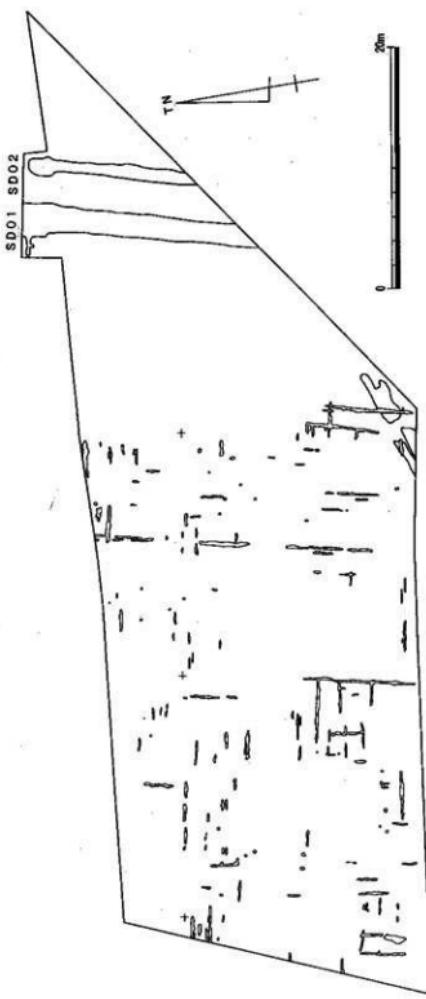


第2図 昨年度調査区と調査区割図

第3図 1~1区 通構配管図



第4図 1区 通構配置図



3. 各調査区の概要

・I 区（第4図参照）

I区は昨年度調査区の北側にあたる部分である。ここでは2面の遺構面を確認した。上層の第1遺構面は地表下40cmで検出し、下層の第2遺構面を被覆する暗褐色粘質土（縄文・弥生時代包含層）をベースとする。主たる遺構としては、調査区北東隅で条里の坪界と考えられるSD01及びSD02の2条の溝状遺構を検出したほか、大半の部分で南に隣接する昨年度調査区から連続する鋤溝群を検出した。これらの溝状遺構は概ね13世紀後半に埋没したもので、少なくとも本遺跡周辺の条里地割が13世紀以前に施工されたことがわかった。下層の第2遺構面は地表下約60cmで、黄灰色粘質土をベースとする。遺構は希薄ではあるが、やはり北東隅を中心に柱穴群を、上層SD01西岸付近で不定形の土坑を数基検出した。

以下、主な遺構の概略を述べる。

SD01（第5図参照）

検出長19m、2.4m、深さ0.8

mを測る。主軸方位はN-15°-Eにとり、南から北へ流れる溝状遺構である。調査前は水田を区画するコンクリート畦畔が残存していた。東側が一段高く、テラス状を呈する。V字形を呈する西側は埋土の状況から掘り直しによるものと考えられる。

出土遺物には、青磁碗、土師器

杯などがあり、13世紀中葉から後半にかけて埋没したものと推定できる。

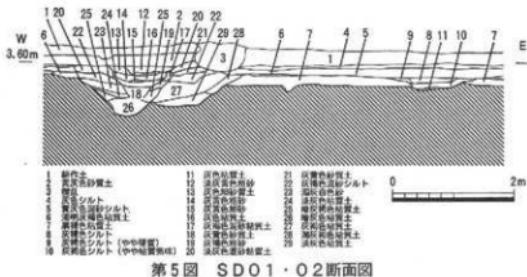
SD02（第5図参照）

SD01の東側にほぼ並行して延びる溝状遺構である。検出長14m、幅0.9mを測るが、深さ0.2mと浅く、断面形は皿状を呈する。調査区北端で終結しており、北から南へ低くなっている。土師器杯などが少量出土している。

SD01同様13世紀中葉から後半にかけて埋没したものと考えられる。

SD01・02はその検出位置および方位からいわゆる坪界の溝にあたるもの

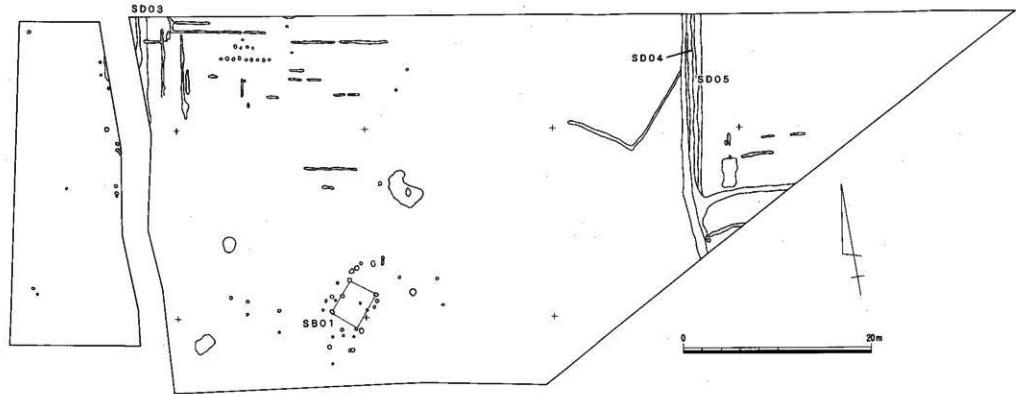
であると考えられるが、その機能していた時期は13世紀以前であることが判明した。その後、13世紀後半以降に埋没したものであろう。



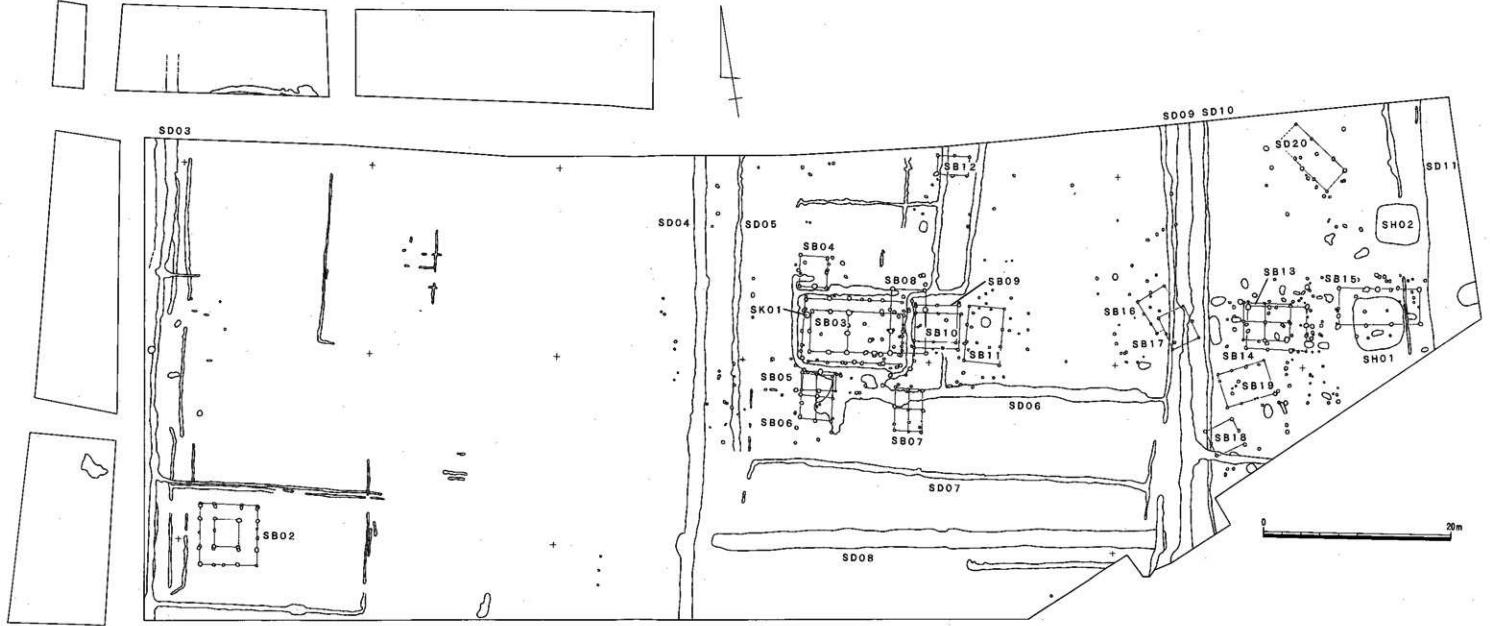
第5図 SD01・02断面図



写真1 SD01・02完掘全景(南より)



第6図 I-1区 造様配置図



第7図 I-2区 造構配置図

・Ⅱ区（第6・7図参照）

この区画は、里界である舟入川の北側にあたり、調査の都合上、南側のⅠ-1区と北側のⅠ-2区の2つの調査区に分割して調査を実施した。

南側のⅠ-1区では、遺構面は2面確認でき、そのうち上層の第1遺構面では、北西の隅で延長約7mほど条里地割の坪界の溝と考えられる溝状遺構（SD03）を検出した。SD03は舟入川南側のⅠ区の東端で検出した坪界の溝と方向や検出位置等から同一のものと考えられる。また、調査区中央やや西よりの部分で平安時代から鎌倉時代頃の南北に走る浅い溝状遺構（SD04・05）を2条検出した。このSD04・05は、後述するSD04に続くものでⅡ区の属する坪を東西に二分する溝状遺構である。遺物は少量であるが、土師器の破片等が出土している。Ⅰ-1区では、これらのはかに遺構は検出できなかった。後世の削平のため、推測であるが、Ⅰ-1区は水田や畑として機能していたものと考えられる。

下層の第2遺構面においては、縄文時代中期頃から弥生時代にかけての浅い自然流路の埋没したものと考えられる落ち（SR01）を確認した。埋土中からは縄文土器のほか、多量のサヌカイトの剥片や石礫、石庭などが出土し、槍先形尖頭器も1点出土した。そのほかには、SR01の南西において等高線に沿うような形の掘立柱建物跡1棟を確認した。出土遺物はないが、主軸の方向が条里地割と合致しないこと等からみて弥生時代の所産であると考えられる。

Ⅰ-2区においては、古代末期から中世にかけての掘立柱建物跡群をはじめとする遺構を検出した。また、いわゆる坪界と考えられる溝状遺構のほか、坪内の土地利用の実態を具体的に示すと考えられる溝状遺構（SD04・08）等も検出した。また、東隣の坪の一部も調査し、弥生時代後期の竪穴住居跡2棟および掘立柱建物跡5棟、13世紀頃の掘立柱建物跡5棟、柱穴群、柵列、土坑などを検出した。

以下、主な遺構について説明する。

SH01（第8図参照）

調査区東端近くで検出した2棟の竪穴住居跡のうちの1棟である。平面形は隅丸方形で東西5.3m、南北5.6m、深さ0.2mを測る。二重の壁溝を持ち、内側の壁溝は全周する。4主柱穴



写真2 Ⅰ-2区全景（北より）

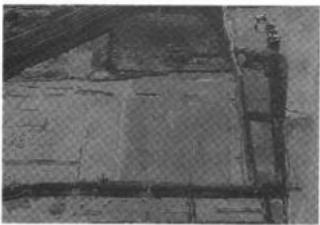


写真3 Ⅰ-2区西半部全景（北より）



写真4 Ⅰ-2区全景（西より）



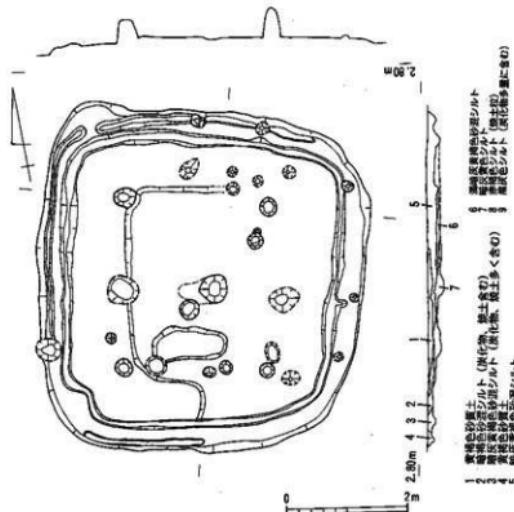
写真5 Ⅰ-2区東半部全景（北より）

を持ち、柱穴と壁溝の間は東側を除く3方にいわゆるベッド状遺構が認められる。北側のベッド状遺構の法面下端に炭化物が充填された極めて細い溝状遺構を検出した。床面からは鉢形土器・甕形土器・壺形土器等多数の土器が出土したが、その多くは西半分の主として壁際からである。またベッド状遺構の北西隅からは、管状土錐が5点まとまつて出土した。検出面での住居跡覆土は大半の部分において赤褐色を呈し、焼土塊・焼土粒・炭化材及び炭化物が一面に広がっていたことから、焼失家屋であったことが窺われる。また壁溝の状況から、主

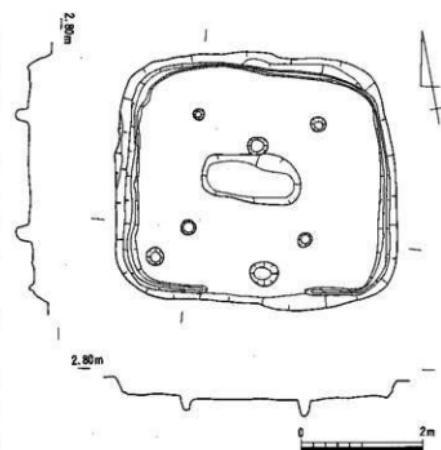
柱穴はそのまま生かした規模の拡張を伴う建て替えがあったものと考えられる。時期は出土遺物から弥生時代後期末と推定できる。なおSH01の埋没後、中世の掘立柱建物SB15が構築されている。

SH02（第9図参照）

SH01の北東約6mで検出した竪穴住居跡である。平面形は隅丸方形で、東西4.6m、南北4.1mとやや東西に長い。検出面から床面までの深さは25cmを測る。4主柱穴をもち、中央にはやや歪な長円形のピットが所在する。北側に隣接するピットと共に、埋土に炭化物が多く混じることから、SH01同様灰穴及び炉跡の可能性を持つ。床面から脚台付無頸壺、甕、鉢等多数出土した。南辺中央部を除いて壁溝が巡る。床面はほぼ平坦である。暗褐色砂混じりシルトを中心とする覆土には小児人頭大の痕跡を含む砂礫が多量に混じり、洪水によって廃絶した可能性を窺わせる。



第8図 SH01平・断面図



第9図 SH02平・断面図

時期はSH01と同様に弥生時代後期末と考られる。

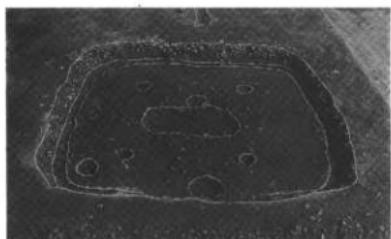


写真6 SH02完掘状況（南より）



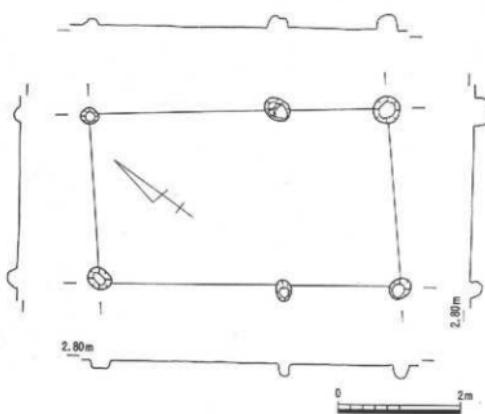
写真7 SH02遺物出土状況（東より）

SB20 (第10図参照)

調査区北東部で検出した掘立柱建物跡である。N-38°-Wに主軸をとる。2間 (4.8m) × 1間 (2.9m) と想定する。桁行間と梁行間の柱間の距離は3m, 1.8mと違いがある。柱穴埋土は暗褐色を呈するシルトである。出土遺物は細片であり詳細は不明であるが、弥生時代のものと考えられる。

SB17

SD02・24等に切られた状態で検出した掘立柱建物跡である。N-14°-Wに主軸をとる。2間 (3.7m) × 1間 (3m) の規模である。柱穴埋土はSB02同様暗褐色シルトである。柱穴から甕の口縁部から体部にかけての破片が出土しており、弥生時代後期後半のものと考えられる。



第10図 SB20平・断面図

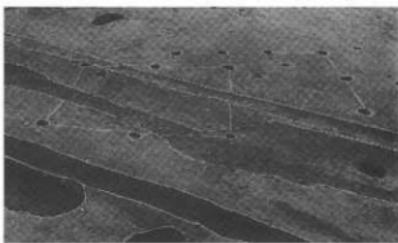


写真8 SB17全景（北東より・右奥はSB16）

SB03

II-2区の属する坪の北東部で検出した梁行2間×桁行5間の掘立柱建物跡である。主軸は周辺の条里地割とほぼ直交するN-100°-Wをとる。東以外の周囲に庇と思われる柱穴が巡り、三面庇の建物をここでは復元しておきたい。また、西側の母屋と庇の間に直径60cmの土坑(SK01)も検出した。庇の周囲には雨落ち溝と考えられる幅40cm、深さ10cm程度の溝状造構(SD06)が巡っている。この溝状造構は北東の隅で開口している。SB03からは大量の遺物が出土している。特にSB03の西側と東側で多く出土している。東側からは土器の底部を円形に削った円盤状土製品も出土している。また、東側から出土した楕円形の石材とSK01から出土した石材が接合することが判明し、SK01とSB03は住居の廃絶に伴い、密接な関係があるものと考えられる。



写真9 II-2区掘立柱建物跡群（北より）



写真10 SB03全景（西より）



写真11 SB03雨落溝（SD06）土層（南より）

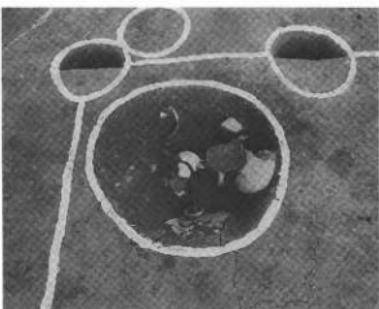


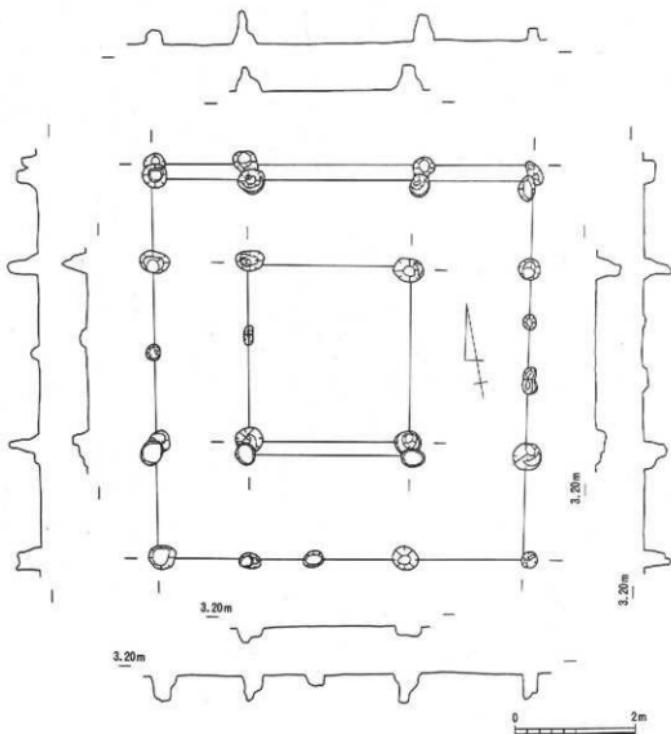
写真12 SB03内SK01遺物出土状況（南より）

SB02 (第11図参照)

Ⅰ-2区の南西隅で検出したほぼ方形のプランをもつ掘立柱建物跡である。柱間の数からいえば、3間×3間、柱間寸法からいえば、3.5間×3.5間の掘立柱建物跡である。内部に柱間の数1間×1間、柱間寸法1.5間×1.5間の空間を持つ。西側は坪界の溝状遺構が北流し、また、深い溝状遺構を南北両側で検出し、東側には溝状遺構は検出できなかったことから、この掘立柱建物跡の入口は東面しているものと考えるのが妥当であろう。



写真13 SB02全景 (南より)



第11図 SB02平・断面図

柱穴には1度建て替えられた痕跡があり、若干の切り合い関係が認められる。柱穴内からは13世紀代の土師質の土釜片、土師器の杯の破片等が出土しており、13世紀代に廃絶したものと考えられる。

SB02は、入口が東面すると考えられること、また、東側の柱列の中間に浅い扉の軸受けのような柱穴が2つ認められ、三枚扉を持つものと考えられること、北東の掘立柱建物跡群からみてほぼ真西にある場所に1棟のみ孤立して建てられていること、などから考えて村落内寺院的な性格を与えることができよう。さらに古代末から中世にかけての時代背景を考えると、本尊は阿弥陀如来であった可能性が高いと考えられる。残念ながらこれを示す遺構および遺物は出土していないが、類例を待って検討したい。

SB13・14

SB14は、調査区中央やや東寄りに位置する3間(6.3m)×2間(4.3m)の掘立柱建物跡である。ほぼ条里地割に直交に主軸をとる。柱穴埋土は主として灰色シルトである。SB13はSB14と同じ位置に殆ど重なる状態で検出した総柱の掘立柱建物跡である。2間(5.4m)×2間(4m)のやや東西に長い長方形を呈する総柱の掘立柱建物跡である。主軸方向もSB14とほぼ共通する。先後関係は不明であるが、いずれも13世紀代と考えられる遺物が出土している。

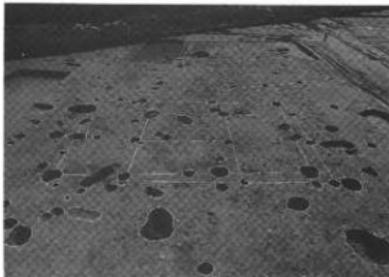


写真14 SB13・14全景（北より）

SD03

Ⅱ区の西端で検出した溝状遺構である。Ⅰ区のSD01・02から連続するものと考えられ、Ⅱ区の南側では現代の街路の下を走っているものと思われ、検出できなかった。現代の街路がやや蛇行して北へ延びているため、北側では幅約1m、深さ約20cmの規模を確認することができた。また、SD03が機能する以前に存在していたと考えられる溝状遺構も数条検出しているが、幅・深さともその規模は小さい。

SD03からはほとんど遺物が出土していないが、埋土の状況から判断してⅠ区の溝状遺構と同時期の13世紀後半に埋没したものと考えられる。



写真15 SD03上層断面（南より）

SD04

Ⅱ区の属する「坪」を東西に二分する南北方向の溝状遺構である。幅約1.5m、深さ10cmを測り、非常に浅い。南側では現代のコンクリート畦畔に切られ、また、2条に分岐する。

SD08

SD04によって東西に二分された「坪」の東半分をさらに南北に二分する東西方向の溝状遺構である。幅約1.5m、深さ20cmを測る。西側はSD04と交差せずに、2mほど残している。東側は調査区外であったが、確認のために拡張したところ、この「坪」の東側の坪界の溝と考えられるSD09・10とも交差していなかった。つまり、このSD08は排水用の溝ではなく、単に居住域を区画するための溝であったと考えざるを得ない。

出土遺物は少量であるが、12世紀代の黒色土器の椀等の破片が出土しており、北側に展開する掘立柱建物跡群と同時期に機能していたものと考えられる。

SD06・09・10

いずれも調査区中央を南から北へほぼ並行して流れる溝状遺構である。SD10が中央部でわずかに東に湾曲しているが、他の2条は主軸をN-9°-Eにとり、直線的である。

SD09は、並行する3条の溝状遺構のうち最も規模が大きく、検出長42m、幅1.4mから1.6m、深さ0.2mを測る。近代の洪水砂層が南端から中央部にかけてほぼ上層を被覆しており、埋土及び一部両岸地山をも浸食していたため、出土遺物も希薄でわずかに土師器の杯、土師質土釜片が少量出土しているのみである。埋土は基本的に灰色シルトである。残存状況の比較的良好な北よりの部分では、断面形は浅い皿条を呈するが西側がテラス状に一段高くなっていた。

SD10は、SD09の約1.5m東に並行して北上する。検出延長41m、幅0.4m、深さ0.1~0.15mを測る。断面形は浅いU字状で、埋土は暗灰黄色シルトである。出土遺物は土師器の杯、小皿の破片が少量出土しているのみである。出土遺物の形態等から判断して12世紀中葉以前に埋没したものと考えられる。

なおSD09が調査区南端で、概ね共通する埋土をもち、切り合い関係が認められない溝状遺構と倒T字状に直交しており、SD10はこの溝状遺構に切られる状況で検出していることから、SD10はSD09に先行すると判断できる。

SD06は、SD09の西側で先述のとおり湾曲気味に延長32mの規模で検出した。南端は極めて浅くなり、終結している。その約2.5m北で、西側へ倒T字状に分岐している。幅0.3~0.5m、深さ0.1mを測る。断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土は濁暗灰色シルトである。結果的にSB03を囲繞する雨落溝に統くことになり、SB03からの雨水等の排水用のものであろう。先述のとおり、SB03周辺では遺物の出土量は多いが、東へ行くにしたがって、その量は希薄となる。黒色土器の椀、土師器の小皿、土師質土釜の体部や脚部片が出土している。黒色土器の椀の形態からみて12世紀代でも中葉以前のものと考えられる。

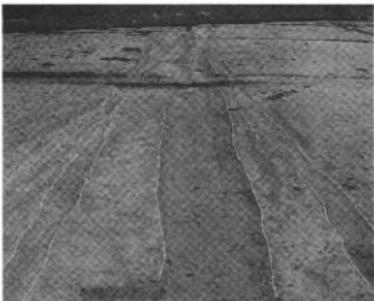
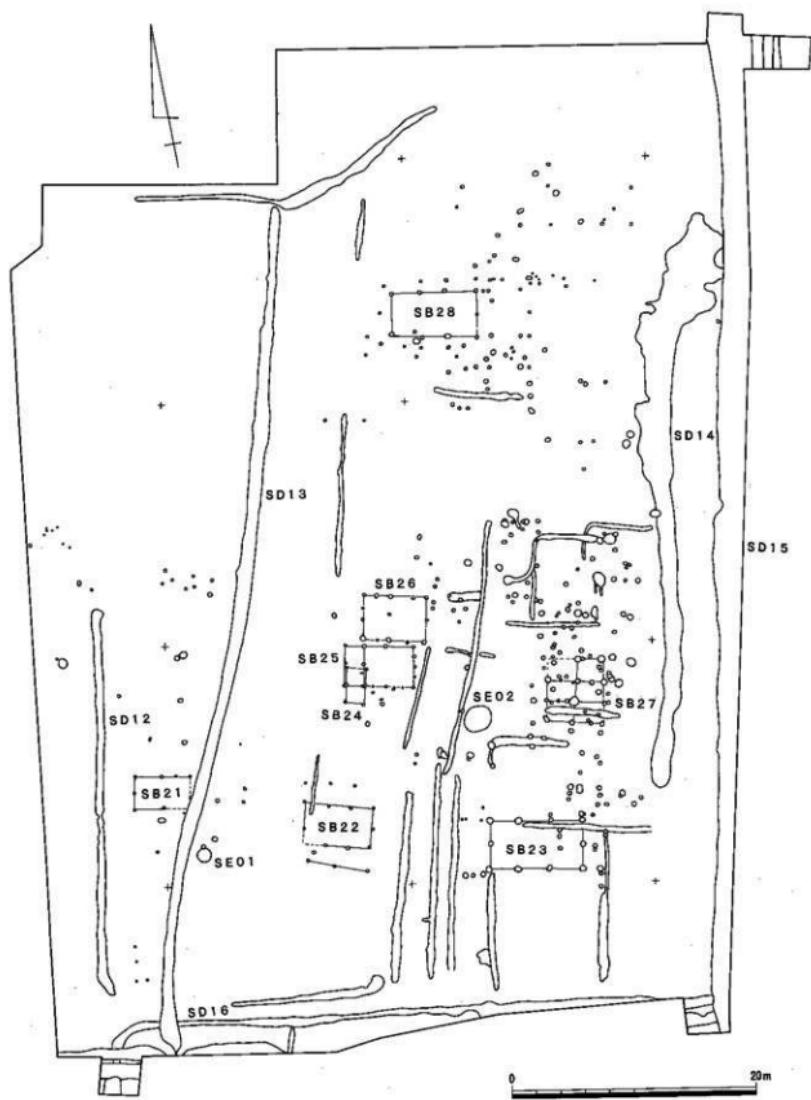


写真16 SD09・10全景（北より）



第12図 Ⅲ区 造構配置図

Ⅱ区（第12図参照）

Ⅱ区では条里地割に沿うと考えられる南北方向の溝状遺構と東西方向の溝状遺構を検出している。また、条里地割に主軸を合わせた掘立柱建物跡群も検出している。掘立柱建物跡群とあわせて、南側の調査区で見られなかった井戸も3基検出した。そのうちSD14・15・16は坪界の溝であると考えられる。

以下、主な遺構について概説する。

掘立柱建物跡はⅡ区で合計8棟検出した。出土遺物から考えて8棟とも、ほぼ同時期である。ただ、SB21・22・23・24・25・26の埋土は青灰色砂質土、SB27・28の埋土は黒灰色砂質土であり、また、SB24・25・26は建て替え、もしくは近接していることから、少なくとも5つの時期があると思われる。先述のように出土遺物の時期に差が無いことから、5つの時期は非常に短いものであろう。

SB25・26にはそれぞれ柱材が残存していた。そのうち1本は断面が正方形になるよう、面取りをしているのが確認できた。

SB27はⅡ区唯一の総柱の掘立柱建物跡である。

SB23

Ⅱ区南東部で検出した2間×3間の掘立柱建物跡である。梁行4m、桁行7.6mを測る。主軸方向は条里地割に直交している。柱材こそ残っていないものの、柱痕は確認できた。雨落溝は検出できなかった。



写真17 Ⅱ区全景（南より）



写真18 Ⅱ区掘立柱建物跡群（西より）

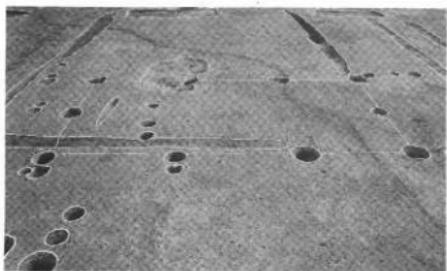
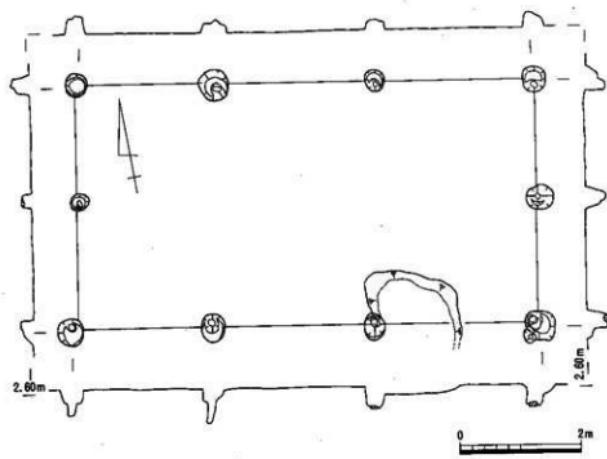
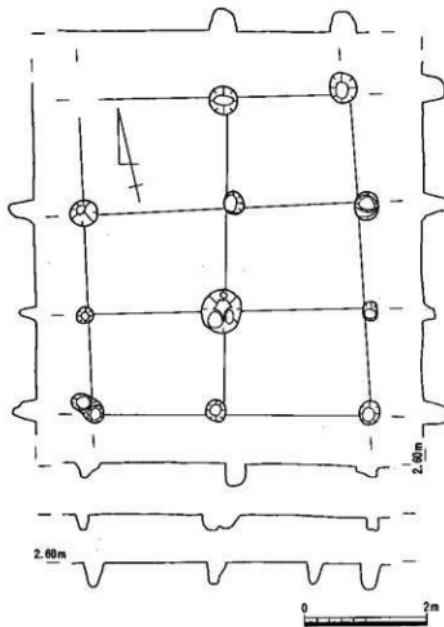


写真19 SB23全景（北より）



第13図 SB23平・断面図



第14図 SB27平・断面図

S B27

2間×3間のⅡ区唯一の総柱の掘立柱建物跡である。東西4.5m、南北5.4mを測る。

柱間の距離は梁行である東西方向が約2.4m、桁行である南北方向が約1.6mであるが、全体的にややいびつな柱の並びになっている。

総柱の掘立柱建物跡はⅡ区では唯一のものであり、周辺の掘立柱建物跡に居住していた人々の共有の倉庫としての機能を考えることができる。

しかしながら、集落の中における居住用の建物と倉庫と考えられる建物の比率等の問題は今後考えるべき問題であろう。

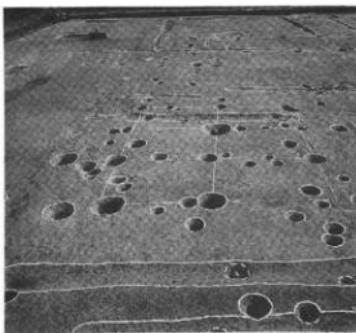


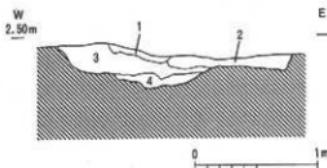
写真20 SB27全景（北より）

SD15

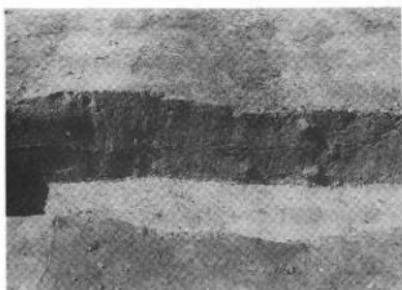
Ⅲ区東端を南北に走る。条里の方向と合致し、香川郡十条19里を36坪に分割する坪界の溝であると考えられる。調査前にはこの部分にコンクリートの畦畔があり、現在でもこの場所で水田を区画していたことがわかる。

SD15の埋没は数回に渡ることが土層断面の観察によって窺える。最下層からは古代末～中世初頭にかけての遺物が、その上層からは近世の遺物が出土している。新しくても古代末～中世につくられた溝が近世になつても機能していたことは他の溝と異なる。

また、SD15の西にはSD14が南北に走っている。調査区北部でおよそ90度東へ折れ、SD15に切られる。このSD14からはSD15よりも少し古い時期の遺物が出土している。SD14はSD15がつくられる以前に坪界の溝として機能していた可能性がある。



第15図 SD15断面図



SD16

Ⅲ区南端を東西に平行して走る。SD16は別の溝に切られており、別の溝のほうが若干新しいと考えられる。SD16もSD01同様、香川郡十条19里を分割する坪界の溝であろう。Ⅲ区とⅣ区の間には市道14号線が東西に走っており、現在でもこの部分で土地を区画していたことは明らかである。

井戸は3基検出している。

SE01・02は石組みの井戸であり、埋土・出土遺物から考えて、ほぼ同時期のものであると考えられる。そのうちSE01の最下層には曲物が井戸枠として残存していた。

SE03の埋土はSE01・02とは異なり、出土遺物もSE01・02に比べて古い時期のものである。また、SE03はSD14に切られており、SE03埋没以後にSD14が機能していたと考えられる。

SE01（第16図参照）

Ⅱ区南西部で検出した。直径は約1m、深さは約0.75mである。埋土は青灰色砂質土を中心とする。検出面から約40cmは石組みであり、下層には厚さ約3mmの板でつくった直径約35cmの曲物が井戸枠として残存していた。残存高は約25cmである。

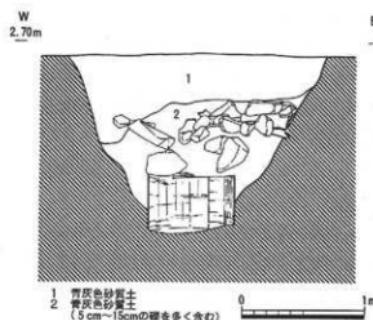
また、SE01の内部には多量の土器が入っていた。最も多いのは、土師質土器の土釜である。土釜には在地産と思われるものと5mm四方の叩き目の認められる亀山焼のものとが出土している。その他には土師器の小皿や杯も出土している。使用目的は不明であるが、緑泥片岩の塊石も数個出土している。

亀山焼の土釜や土師器の小皿、杯の特徴から見てSE01は13世紀頃に廃絶したものと考えられる。

Ⅲ区では条里制に伴う溝状遺構、掘立柱建物跡8棟、井戸3基を検出した。出土遺物から判断すると、それらの遺構が機能していた時期は大きく3つに分けることが可能である。つまり、SE03が機能していた時期、SE03埋没後にSD14が機能していた時期、そしてSD15といった条里地割としての溝が整備され、掘立柱建物跡やSE01・02の両井戸が機能する時期である。

SE03が機能していた時期に近くに居住域は無く、SE03がどういった目的のための井戸なのか、判断は難しい。埋土中には、ほぼ同時期の土器が多量に入っていたため、意識的にSE03を廃絶させたと考えることもできる。

SE03の廃絶後、SE02が築かれる。SD14が機能していた時期にも近くに居住域は存在しない。SD14の目的も明確ではないが、仮に条里制に伴うものであるとすれば、条里制の施行によってSE02を築く必然性が生じてくる。つまり、SE03を意識的に廃絶させなければならない理由が出てくるのである。SD14からも、同時期の多くの土器が出土しているため、SD14も意識的に廃絶させられた可能性がある。



第16図 SE01断面図



写真22 SE01遺物出土状況（南より）

その後、SD01・26・27を築くことによって坪の境を明確にし、建物や井戸を築き、人々がこの場所で生活するようになる。SD02はSD01（完全な条里制の施行）を築くために廃絶させられたと推測できる。また、南北に走るSD12は条里制の地割りの方向と合致している。SD18より西側では住居跡は検出できなかった（II-2区参照）。SD12は居住域とそれ以外の土地（水田・畠地等）を区分する溝であろう。

II地区においては、条里制施行直前から、施行されるまでのマクロな土地利用の移り変わりをみるとができる。

IV区（第18図参照）

IV区は、II区の属する坪からさらに2坪北側にあたる部分である。予備調査の結果、柱穴群が検出されたため、集落域の存在が推定されていた。地形的には本津川のすぐ西側にあたり、北側へ緩やかに落ちていく。標高は約3mとかなり低く、調査中にも下層からの湧水にたびたび悩まされることとなった。IV区の西側には条里地割にあたると思われる水路が現在も通っている。この地割を南へ伸ばすと、II区の東端で検出した溝状遺構（SD15）に続くものと考えられる。

調査の結果、条里地割に沿うと考えられる溝状遺構は現存水路の西側で検出した。SD17がこれである。東側の肩は現代のコンクリート畦畔の掘り方によって削られているので、幅は不明であるが、少なくとも約2mはあるものと思われる。深さも50cm～60cmと深く、断面形は緩やかなU字形を呈している。出土遺物は少なく、上層からは寛永通宝を含む18世紀以降の陶磁器等が出土しており、最終的に近世中頃以降に埋没したことがうかがえる。最下層の暗灰色粘土からは数点の土師質土器が出土しているが、時期を特定できるほどのものではないが、概ね13～14世紀代のものであると考えられる。

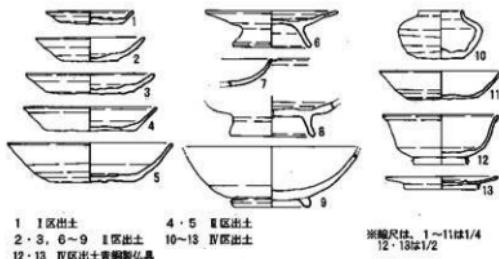
現存水路の東側は、II区以南の調査区とは様相を全く異なる。まず、調査区のほぼ中央を東西に走る溝状遺構を検出した。これは現代の地割の溝状遺構であり、後世に構築されたものである。この溝状遺構のすぐ北側でやはり東西に走る溝状遺構を検出した。この溝状遺構は西側で現存水路の手前でクラシック状に北へ方向を変え、条里地割に沿って北流する。さらに調査区の北端部で今度は東へ方向を変え、東へ走る。この溝状遺構で囲まれた範囲においておびただしい柱穴群のほか、土坑・不明遺構等の様々な遺構を検出した。それらの中には条里地割よりも若干西側へ方位をとった溝状遺構もあり、条里地割施工以前のものである可能性がある。これらの溝状遺構からは13世紀代の遺物が出土しており、このころにはIV区周辺には条里地割は施工されていなかった可能性も考えられるが、速断はできない。より詳細な遺物の検討をした上で結論を出したい。柱穴群の中には少なくとも3種類の埋土があり、さらに出土遺物に13世紀～15世紀のものが含まれることからII区以南の調査区と異なり、かなり長い期間この付近に占地していたことがうかがえる。また、IV区の中央や北よりの部分に雨落溝と考えられる溝に囲繞された区画があり、この内側で掘立柱建物跡が復元できそうである。主屋と考えられる建物にあたると考えられる。

なお、このIV区北側の柱穴群およびそれを囲む溝状遺構からは大量の遺物が出土している。大半は土師質の土釜や土鍋片、土師器の杯・小皿であるが、南側で全く見られなかった金属器も出土している。特にSP939から出土した青銅製の小型碗は付近の上面精査中に出土した青銅製の小型器台とセットになるもので、密教法具の六器の一つであると思われる。また、やはり南側で出土しなかった銅鏡も約10種類ほど出土している。いずれも北宋鏡である。その他に青銅製の紅皿や刀子、不明鉄器なども多く出土

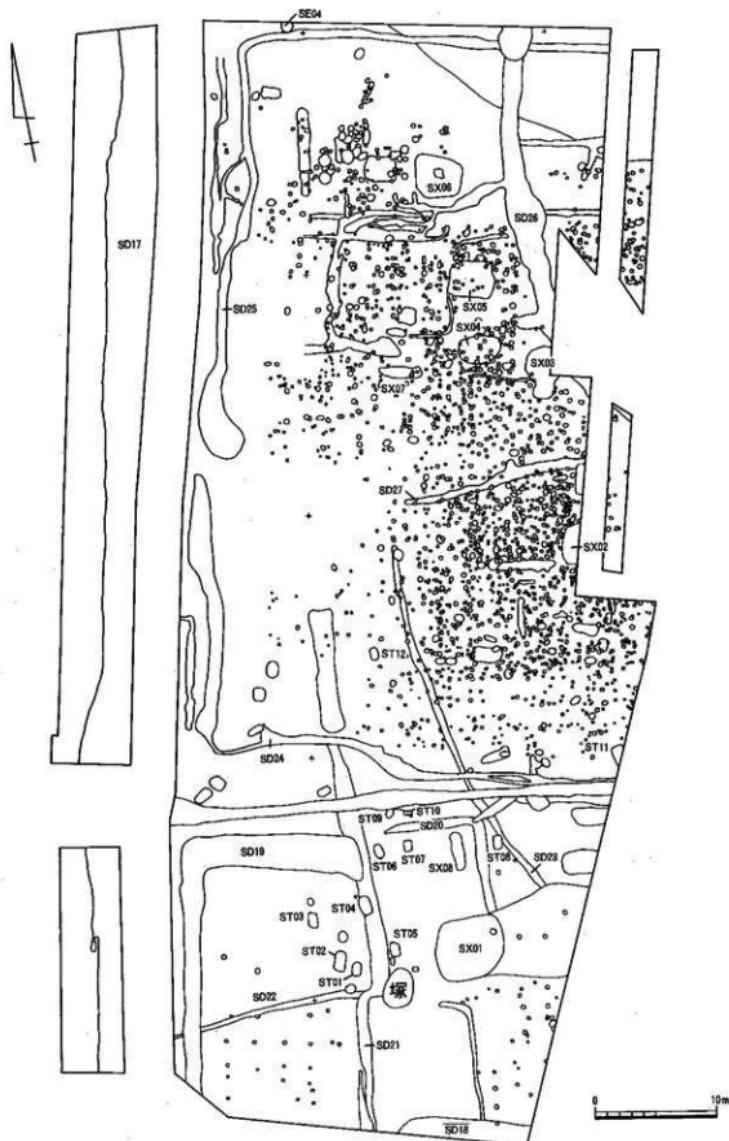
している。硬質砂岩製の小型の硯や滑石製の不明石製品、数種類の石材に及ぶ砥石類などの石器も出土している。また、食用に供していたと考えられる大型は乳類の骨盤の骨も出土している。これらの遺物を概観すると、このあたりは中世後半にはかなり栄えていた場所であったことは容易に推測できるが、本津川をさかのばれば瀬戸内海へすぐ出ができる地の利を考え合わせると、海浜に面した町あるいはその周辺の集落、もしくは集落内の寺院的な性格を与えることができるのではないかろうか。

以上がIV区の北半部の概観であるが、南半部になると、柱穴群はあまり見られなくなる。南半部には条里地割に規制されず、むしろ、等高線に直交するような方向の溝状遺構が数状認められる。これらの溝状遺構からは弥生時代前期頃の土器が出土しており、かなり早い段階から人々の生活の痕跡が認められる。南半部の南西隅および南東隅には若干の柱穴群が認められ、1棟以上の掘立柱建物跡が復元できる。南半部で注目されるのは、ちょうど南半部を囲むように検出した2条の溝状遺構である。SD19とSD20がこれにあたるが、いずれも途中でクランク状に曲がり、南半部を囲むようにしているが、約2mの間隔をおいて交わらない。この溝状遺構に囲まれた範囲で長方形の土坑を約10基検出した。そのうち、半数の土坑から人骨を検出したため、これらの土坑群は土坑墓であると考えられる。土坑群は溝状遺構に囲まれた範囲にほぼ含まれるが、明確な意図を持って計画的に配置されたものではない。また、木棺の痕跡のあるものは認められず、副葬品を伴うものもほとんどない。ある土坑墓の人骨は頭部のみ欠損しており、それ以外は非常に良好な状態で遺存していた。また、1基のみ火葬をしたと思われる痕跡が認められた。

IV区は、これまで見てきたとおり、II区以南の状況とは全くと言っていいほど様相を異にする。IV区とII区以南との関係、また、IV区の中だけでも北半部と南半部の様子は異なっており、北部の掘立柱建物跡群と南部の土坑墓群との関係あるいは時期差等、検討すべき問題は多いが、整理作業を通じてこれらの問題について改めて考えてみたい。



第17図 出土遺物実測図



第17図 IV区透構配置略図

4.まとめ

ここでではまとめにかえて、西打遺跡の発掘調査で明らかになったことを明確にし、さらに今後検討すべき問題をいくつか挙げて、まとめとしたい。

まず、調査の結果、明らかになったことは、Ⅱ区以南の調査区において条里地割に合致する溝状遺構がほぼ全域にわたって検出されたことである。これは少なくともこの周辺の地割が13世紀代までさかのぼることを意味しており、その施工の初現が（理念としての条里制を含めて）13世紀以前にさかのぼる可能性をも示唆している。

次に、Ⅰ区で見られたような居住域と生産域とを明確に区画するような一坪内での土地利用の実態が明らかになったことである。これまで古代～中世にかけてのほぼ一坪内を全面調査した遺跡は少なく、從前から歴史地理学や文献史学の面からのアプローチが多かった中世村落の成立および発展について貴重な資料を提示するものと考えている。

また、昨年度の調査の結果も含めて考えると、同一坪内での生活期間は割合短く、同一坪においても時代が変わると、それまで田畠であったところに人々が居住するようになり、あるいはその逆であつたりすることがわかった。これは金田章裕氏の善通寺領および曼陀羅寺領についての詳細な研究すでに指摘されていることであるが、讃岐においては、古代から中世にかけてこのような状態が広く存在していたのではないだろうか。

最後に、今後検討すべき問題を挙げてまとめにかえたい。

まず、この周辺の条里地割の施工時期の問題であるが、検出した溝状遺構から出土した遺物を詳細に分析して地割に沿って構築された溝状遺構の時期を明確にしていきたい。もちろん、それ以前の地割の存在の問題もあわせて考えたい。

次に古代から中世にかけての村落の形成と発展について、香川県内および周辺地域の調査例を分析し、集落の変遷について考えていくたい。

また、Ⅱ区以南と全く様相を異にするⅣ区の集落の性格について、出土遺物の整理を通じて明らかにしたい。西打遺跡の発掘調査が今後の考古学における中世村落の研究の嚆矢となれば幸いである。

Ⅲ. 高松城跡（西の丸町）の発掘調査

1. 調査に至る経緯と経過

高松港頭土地区画整理事業の一環である高松城跡の発掘調査は、平成7年度から継続して行われてきた。平成7年度は、香川県教育委員会が試掘調査を実施し、江戸時代の武家屋敷建物礎石などの存在を確認した。それを受け財団法人香川県埋蔵文化財調査センターは、香川県教育委員会との間で締結した平成7年度埋蔵文化財発掘調査事業の契約に基づいて、平成7年12月から平成8年3月までの4ヶ月間で都市計画道路予定地の900m²について本調査を行った。その結果、江戸時代を中心とした礎石建物や井戸、石組みの溝や暗渠等の遺構や、家紋瓦・鬼瓦や染め付けなどの遺物を検出した。そして当該地が高松城の西ノ丸の西外郭に位置する高松藩の上級臣臣の屋敷跡に相当することや、明確な遺構面が4面存在することなどの成果を上げている。この調査が層位や遺構の面的な広がりなどの今後の調査の基準となった。平成8年度は、4月からの12ヶ月間で変則的な2班体制をとりながら、平成7年度調査区の南に隣接する部分3,639m²の調査を行った。複数の遺構面の存在によって開発予定面積の割には長期の調査期間を要する調査になった。調査の結果、当該地は明治以降の拘置所・集会場などの施設のために表層の一部に搅乱が認められたものの、下位には平成7年度の調査と同様の江戸時代を中心とした遺構・遺物が残っていた。さらに新見知として、最下層に安山岩角礫を用いた護岸施設様の遺構を検出している。その中へ投棄された瓦器や東播系の須恵器などの遺物から中世前半に属するものと思われる。

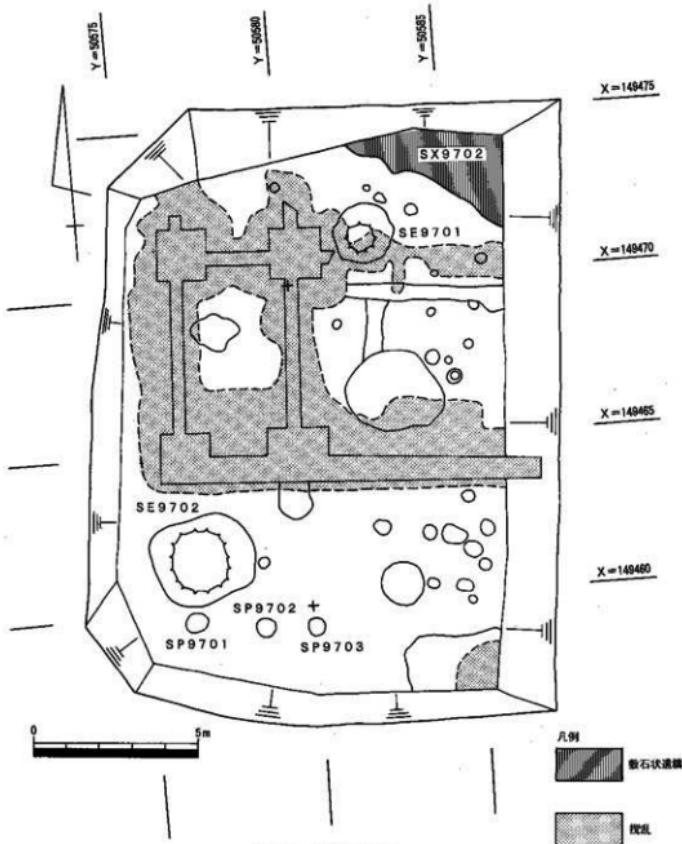
今年度は、平成9年4月1日付けで香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で締結した埋蔵文化財発掘調査事業の契約に基づいて調査を実施した。調査区は都市計画道路予定地の300m²で、平成7年度の調査区の東に隣接する国労会館の一部にある。都市部での調査であり昨年同様に周囲に金属フェンスを設置して、防塵・防音とともに安全確保に留意した。小規模の調査であったが、基礎の撤去に伴う周辺住民からの苦情や予想以上の湧水などで意外と手間取ることになった。現地での発掘作業は6月2日から開始し、7月29日の用地引き渡しを持って終了した。



第19図 遺跡の位置 (S=1/25,000)

2. 調査の概要

今年度の調査区は、平成7年度調査区の東側で平成8年度調査したD区の北側にあたる都市計画道路予定地の300m²である。調査区の北半部は国労会館の一部にあたっており、建物の基礎によって4面が想定されている遺構面の一部が壊されている事が予想された。掘り下げた結果、予想どおり基礎の深度は深くそれに伴う搅乱がかなり下まで及んでおり、第2整地面とよんでいる3面目までの遺構面がほとんど壊されていることがわかった。一方、調査区南半部も北半部ほどではないものの、レンガ・タイルなどの瓦礫を含んだ搅乱が広く深く及んでおり、第2整地面の一部を残すものの面的な把握ができない状態であることがわかった。そのため、4面目にあたる第3整地面での遺構の検出と、昨年度までの調



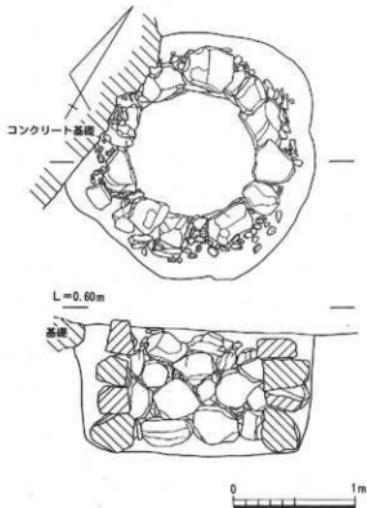
第20図 遺構配置図



写真23 調査区全景（北より）



写真24 SE 9701（西より）



第21図 SE 9701 平・断面図

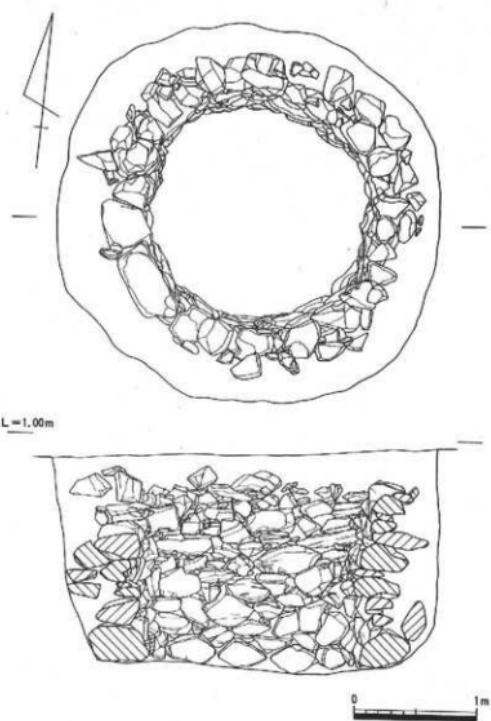
査成果との連続性の把握を主眼として調査を実施した。また、周辺住民の苦情によって建物の基礎をほとんど残したままの調査にならざるを得なかったことは、調査の効率を著しく下げることになった。

調査の結果、石組みの井戸 2基、土坑 5基、溝 2条、柱穴多数および中世前期の貼り石を伴う落ち込みを検出した。

SE 9701 調査区北半部のほぼ中央で検出した石組みの井戸である。掘り方の一部は、建物の基礎によって壊されているが、平面円形を呈する直径2.1mの掘り方の中に、直径1.0m、高さ1.1mの石積み壁面を構築している。石材は比較的大振りなもので、中心となる安山岩以外に花崗岩や閃綠岩がみられる。わずか1個だが、豊島石と思われる円礎溶結凝灰岩が使用されていた。壁面の裏込め土には5cm大の円礎が詰め込まれていた。井戸内部には数個の石材が落ち込んでこれから、本来は5段積みの深さ1.2m程度と推定できよう。内部からは備前焼の壺の底部や土師質土器の皿、陶磁器片がわずかに出土している。

SE 9702 調査区南西部付近で検出した石組み形態の井戸である。掘り方は平面が円形で、その直径は3.1mを測る大きなものである。掘り方の内部には直径1.8m、高さ1.7mの石積みの壁面を構築している。石材は基底部に近い石ほど大振りなものを用いており、そのほとんどが安山岩で他にはわずかに花崗岩がみられる。壁面の裏込め土には、掘り方の土砂をそのまま使用しており、礎などを詰めた形跡はみられない。内部には壁面のものと酷似する石材が多く量に落ち込んでいることから、本来はもっと深い井戸であったことがわかる。埋土の中からは、多量の平・丸瓦とともに備前焼すり鉢、土師質の灯明皿、天目茶碗、磁器碗、鉄釘や鉈(かすがい)、煙管雁首、明鉄(洪武通宝)などが出土している。

S X 9702 調査区の北東隅付近で検出した多量の安山岩を伴った落ち込みで、敷石状遺構と呼称する。第3整地面をなす土層のすぐ下に存在し、掌大の板石状の安山岩角礫を、乱雜ではあるが一応面を揃え



第22図 SE 9702平・断面図

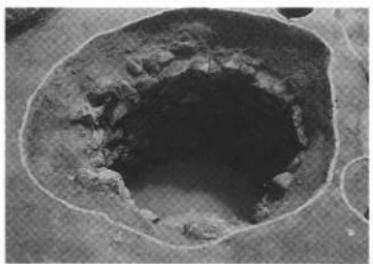


写真25 SE 9702 (南西より)

たように配列しているようである。昨年度調査区のC区で検出したSX8C204同様の遺構であり、一種の護岸施設と判断できるが杭や横木などの木組みは伴っていない。石の直上などからは和泉型の瓦器椀、土師質土器椀、皿、東播系須恵器椀、白磁碗などが出土している。

3.まとめ

今年度は小規模な調査である上に、基礎などの攪乱が著しいものであったが、17世紀初頭頃の生駒期から松平初期に相当する第3遺構面上で遺構・遺物を確認した。昨年度までの成果との関連をみると、SE9702の南で検出した3つの柱穴はSB8D202を構成するものと思われ、 1×3 間程度の建物が想定できる。当該期の「生駒家時代 講岐高松城屋敷割図」や「講岐高松丸亀両城圖 高松城下図」などの絵図と比較してみると、今回の調査区南半は上坂丹波の屋敷地付近に相当するものと考えることができよう。とするならば、SE9701南側の溝は入谷小兵衛の屋敷地境の可能性もあり得よう。また、SE9702は遺物の年代観などからみると、第1整地面ないし第1遺構面に伴う遺構と考えられる。その段階には、当該地近辺は上級家臣の屋敷地から西下馬への変更がなされており、下馬の北側は畠になっていたことがその後の絵図から読みとことができる。SE9702はその畠で使用する水源として設けられた井戸である可能性を考えられるのではなかろうか。

報告書抄録

ふりがな	たかまつこうとうとちくかくせいりじぎょうにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさかいはう							
書名	高松港頭土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報							
副書名	西打遣跡・高松城跡(西の丸町)							
卷次	平成9年度							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	中西昇・北山健一郎・宮崎哲治・乗松真也							
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4 TEL 0877-48-2191							
発行機関名	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
発行年月日	平成10年3月31日							
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数	
36頁	6頁	30頁			25枚	22枚		
ふりがな所収遺跡名	ふりがな所 在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
西打遣跡	香川県高松市 香西南町1150外	37201	34度 19分 49秒	134度 0分 8秒	1997.4.1 ~ 98.3.31	23,673m ²	土地区画 整理事業	
高松城跡	香川県高松市 西の丸町5	37201	34度 20分 47秒	134度 2分 56秒	1997.6.1 ~ 97.7.31	300m ²	土地区画 整理事業	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
西打遣跡	集落跡	縄文時代 ~弥生時代	竪穴住居跡・掘立柱建物 跡溝・土坑・自然河川			縄文土器・弥生土器 土錐・石鎌・石匙・ 槍形先端頭器		
		平安時代 ~鎌倉時代	掘立柱建物跡・溝・土坑 井戸・土坑墓			土師器・黒色土器・ 須恵器・瓦器・砥石 青銅器・鉄器・錢貨 人骨		
高松城跡	屋敷跡	江戸時代	井戸・溝・土坑・柱穴			瓦・陶磁器	下層に 中世遺構	

高松港頭土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

西打遺跡・高松城跡（西の丸町）

1998年3月

編集 〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4

財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香川県教育委員会

財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター

印刷 富士印刷株式会社